平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（がっこうめい）	美波町立木岐小学校（みなみちょうりつきききしょうがっこう）

校長名：　東　　博　生

所在地：　徳島県海部郡美波町木岐７２

電話番号：　0884-78-0669

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	特別活動

《研究主題》

体験活動を充実し，話合い活動を通して表現力やコミュニケーション能力（言語能力）を高め，望ましい人間関係を築く特別活動の展開に関する研究

－小規模校における取組－

【研究の要点】

研究の重点

1　学級活動の充実と活性化をはかる

〇計画委員を中心に，事前の活動を定着させる工夫と話合いを活性化させる工夫をする。

〇結論に至るまでの話合いを活発化させ，練り上げていく工夫をする。

〇多数決ではなく，話合いで集団決定するための折り合いをつける話合いの実践をする。

〇学級内の諸問題を自分たちの力で解決するために，学級会の議題に取り上げ，解決しようとする態度を育てる。

2　児童会活動を高める

〇代表委員会からサミット(週番活動)を分離し，機能の確立化を図る。

〇委員会活動を見直し，主体的な活動を取り入れる。

〇集会活動を整理し，ミニとロングの集会に分ける。

〇地域主催の「木岐共楽運動会」に児童会が考えた種目を入れ，地域のお年寄りと子どもたちが一緒に活動する。

〇独居老人宅訪問，年賀状配布，学校行事に招待する等，積極的に地域と交流する活動を実践する。

3　クラブ活動を広げる

〇クラブ活動参観日を設け，保護者や地域の方に見ていただく。

〇近隣の学校とのクラブ活動の交流を行うことで，活動意欲の向上を図る。

4　学校行事と児童会活動の関連を図る

〇「立志式」では，学校の目標を校長から6年生に話し，6年生は全学年にそのことを伝える。

〇PTA主催の行事「夏のつどい」では，親子で活動するゲームを子ども達が考える。（児童会と保護者の連携））

〇勤労生産学習で栽培したサツマイモを，地域の「わいわい市場」で販売する。（児童会と地域の連携）

研究の成果と課題

1　成果

〇「聞く」指導を徹底することが，話合いの基盤となることが分かった。

〇計画委員を経験したり，意見の対立を経験したりして，個人の成長が見られた。

〇低・中・高学年での話合いでは，上位学年にリーダー性が育つ。下位学年は，上位学年から学ぶことができる。（高学年の学級会を低学年児童が参観し，効果があった）

〇教職員集団の連帯感や協同感が高まった。

〇地域住民や保護者の方の参加・協力が増えた。

2　課題

〇他校との交流は，計画，継続性，経費等を十分に考慮する必要がある。

〇折り合う力の養成には，低学年からの段階的な指導の工夫が必要である。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

本校は過疎化の激しい漁村を校区にもつ小規模校であるが，地域活性化の核の役割を担っている。子どもを地域で育てようという雰囲気が醸成されているので，地域の住民や保護者は，教育活動に非常に協力的である。

児童は明るく活発で，年齢や性別にとらわれず仲よく遊んでいるが，相手を思いやることが不十分に感じられることもある。

2　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	1	1/2	1/2	1/2	1/2	1	1	5
児童数	6	4	2	7	6	5	1	３１

教員数　１０名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

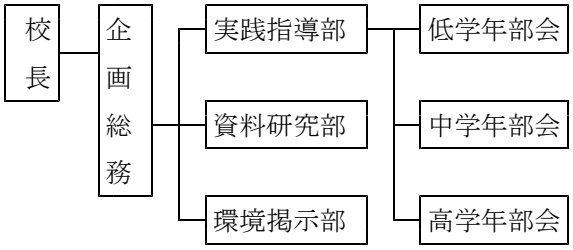
(1) 研究主題

体験活動を充実し，話合い活動を通して表現力やコミュニケーション能力（言語能力）を高め，望ましい人間関係を築く特別活動の展開に関する研究
－小規模校における取組－

(2) 研究主題設定の理由

本校では，学習指導要領で求められている「生きる力」を具現化するために，知･徳･体の調和のとれた人格の完成を目指して，児童に「自立の基礎」を身に付けさせることをねらいとした教育活動を展開している。義務教育終了時点において，「社会に出ても意欲的・積極的に他者と交わりながら，他者を思いやりつつ自分の考えを鍛え，自分を高めつつ社会の質も高めようとする能力や態度」が身に付いていることを目指し，特別活動の実践の中でそれらの能力や態度の育成に通じる力を培おうと考え，研究主題を設定した。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	・研究計画の作成 ・特活年間指導計画の作成 ・１年次実施計画書作成 ・連絡協議会出席 ・教科調査官訪問，公開授業・研究授業・研究会 ・研究会（のべ５つの授業），研究視察，文献研究 ・研究協議会で中間報告，中間報告書提出
平成22年度	・新組織，特活研究計画作成 ・年間指導計画見直し ・連絡協議会出席 ・特活研究会（研究授業）５回，のべ７つの授業実施 ・県特活部会　夏季研修会参加 ・教科調査官訪問，公開授業・研究授業・研究会 ・四国特活研究会　学級活動部会発表 ・研究のまとめ　研究紀要作成 ・研究協議会で報告

2　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 学級活動

① 計画委員の活動が定着

【廊下で計画委員の話合い】

１週間で議題を集め，選び，役割を決め，話合いの柱を決定し，話合いができる準備をするという手順が定着した。

曜日	活　動　内　容
金	議題の提出を呼びかける
月	議題を選び，計画委員の役割を決める
火	全員で議題を決め，話合いの柱を考える
水	柱を確認し決定する 話合いノートに自分の意見を書く
木	計画に従って話合いを進める

【 表１：計画委員を中心にした活動の流れ】

金曜日には誰かが議題箱を見て，入っていなかったら帰りの会で呼びかけができるようになった。計画委員は，その週の業間休憩が話合いになることが分かっていて自主的に集まるようになった。

② コミュニケーション能力が向上

基本的な話し方の指導（マニュアルの作成）や聞く態度の指導を継続してきたので，一人一人の会話が長くなった。また，絵や図に描いたり具体物を用意したり，実際に前で実演したりするなど工夫が見られるようになった。

【図で説明しているところ】【廊下で見学する1･2年】

高学年の話合いを低学年児童が参観することも，本校では何度も行った。写真に見られるように，教師に引率されて廊下から参観する。４５分間全部は見ないが，計画委員の活動する様子や話し方・聞き方などを学んだ。

意見が対立したとき，それぞれのよいところを合わせて折衷案とすることや，支持が少ない方の案は次回に行うことで折れてもらうなどの折り合いの付け方が多かったが，それぞれの意見のよさを取り入れて新しい案を作り出すような，練り上がっていく話合いも徐々にできるようになった。「今日は１つのことしか決まらなかったが，深く話し合えたと思います。」という児童の振り返りがあった。

③ 学級内の諸問題を解決

【集められたエコキャップ】

昨年は，「○○集会をしよう」という集会活動の計画を話し合う事がほとんどであった。それらの話合いは，自分達にとって楽しいことなので進んで準備ができた。しかし，それだけで学級や学校生活が楽しくなるものではない。学級内の様々な問題についても話合いで解決するということを学ばせたいと思った。議題箱にそういった問題のことが入るように気付かせる工夫をいろいろ試みた。

そこで決まった議題が「エコキャップの整理の仕方を考えよう」だった。５年生が，昨年度から始めているエコキャップの収集が，整理されずに乱雑になってきた。どのように集めたら手間がかからず整理できるか，話し合う事にした。

２学期には，仲間はずれの解消に向けてみんながもっと仲よくなれるにはどうしたらいいか話し合った。話合いの結果，「輝き見つけよう会」をして一人一人のよいところを見付けようということになった。

【輝きの木】

話合いで練り上げた結果，ヒマワリ型のパネルを作ることになった。一人一人のよいところが花びらに書かれた。ひまわり会議の名にふさわしく，全員で１つの大きな花を作ることができた。

(2) 児童会活動

① 参画する態度の育成

これまで，児童会の活動は６年生が決めたことがそのまま児童会の活動になることが多かった。（６年生の学級会＝児童会の決定）しかし，この２年間でそれを変えることができた。全校朝会で代表委員会の予告をし，各学級で議題を話合い，持ちよって代表委員会で決定することで，代表委員会が校内で最高の議決機関であることが定着した。これまでは，毎年同じような集会活動を繰り返し，６年生が考えてくれたことを行事のように参加するという受動的な児童会の活動であった。しかし，その前後に各学級で話合いをすることで１年生から６年生まで全員が主体的に参加する児童会集会活動になってきた。

【いものつるなわとび】

この写真は，いもほり集会で班対抗「いものつるなわとび」をしているところである。このなわとびは，１年生が学級会で話し合って代表委員会に提案し賛同され実施したものである。いものつるを編んでロープにするのが難しかったが，高学年を中心に力を合わせて，楽しく活動ができた。

ア　朝のワイキキっ子活動

【班の旗を制作】

朝のワイキキっ子活動は，異年齢集団による自由遊びである。４月に班編制をし，１年間メンバーを変えずに活動をしている。４月に班の旗を制作し，どんな活動をしたいか話し合った。１年生や２年生の意見もしっかりと反映する。学級会での話合いが生かされてきた。

ワイキキっ子班（異年齢集団）による様々な活動も，毎回教師がつかなくても６年生を中心に活動ができるようになった。

イ　ミニ集会

【ミニ集会の様子】

３つの委員会が交代で担当し，全校集会のない月に年間６回朝の活動を１０分延長して行っている。この会は，お誕生者の紹介とインタビューで始まる。先生も紹介される。その後，全体で楽しむゲームや委員会の活動の発表を行っている。一人一人の誕生日を全校で祝うということは，小規模校でないとできないことだ。一人一人に注目が集まり，自尊感情の高まりにもつながっている。

ウ　児童会集会活動

年間５回，代表委員会で決まった集会を行う。集会の前後で，必ず学級や異年齢集団班での話合いを行っている。児童全員が，集会やその中で行う自分の目的が分かっているため参画する態度で臨むことができるようになった。

【人権集会での話し合い】

写真は人権集会の様子である。ワイキキっ子班での話合いに保護者や教師も参加している。

②　地域との交流

【わいわい市場での販売】

いもほり集会の後，たくさん採れたので地域の人にも分けあげようということになり，わいわい市場で販売することにした。毎月第１日曜日9:00～10:00の間行われている地域の青空市。学年単位で参加したり児童会で参加したりしている。品物を販売するということで，児童の意欲は

大変高まった。直接地域の人と触れ合うことも，回数を重ねているので慣れてきた。

(3) クラブ活動

① 自発的自治的な活動

【クラブのノート】

４年生以上で１９名。児童の希望から今年は３つのクラブを設置した。職員数が１０名なので，もっとクラブ数を増やすこともできたのだが，２・３人では異年齢集団が機能しないのでぎりぎりの数と考えて３つにした。

クラブ活動は，自分で選んで集まっているので主体的に取り組めているが，年間の計画を立てるときに全員の意見が反映できるような話合いが展開されるようにした。

② クラブ活動参観

昨年から，クラブ活動の発表会を始めた。これは２月に行い，１年間のまとめと３年生のために「クラブってこんな事をしているよ」というクラブ紹介的な活動であった。そこで今年は，保護者や地域の方に見てもらおうということになり，

【親子で楽しむクラブ】

11月のオープンスクールの日に人権集会とクラブ活動を参観してもらった。

どのクラブも，親子で一緒にできることをした。初めてのクラブ参観だったので，児童のいつもと違う一面が見られてよかったという意見があった。

地域の方も数名見てくれていた。木岐には，俳句や書道，生け花，グランドゴルフやゲートボールなどをしている方がいる。これらの方と一緒にできるようなクラブの方向性を考えてはいるが，まだ具体的には進んでいない。将来の児童数減少を考えると，全時間でなくても地域の方と一緒にクラブを行う時間ができればいいなと考えている。

③ 交流

【バスケットボール交流】

昨年，スポーツクラブが近隣の学校とバスケットボールの練習試合を行った。試合日程が決まってから，本校ではかなり熱が入って，雨の日の休み時間などにはバスケットをするなど意欲の高まりが見られた。規模の小さい本校が勝つ結果となり，本校児童にとっては，よい刺激となりやってよかったなという感想であったが，相手校はそうでもなく，次の試合は実現しなかった。今年は運動の苦手な子が多く，交流したいという意見も出なかった。小規模校の現状から考えれば，自校だけで５対５の三角ベースボールをするより，他校を交えた９対９のベースボールを経験できる方がよいと思う。

(4) 学校行事

児童数の減少とともに，学級数・教職員数が減少することも大きな悩みである。学校行事をいかに精選・縮小していくかは大きな課題となっている。

① 参画意識を育てる

ア 立志式

【立志式の後で】

４月当初，校長室に６年生が集まって校訓についての話を校長から聞く。６年生はそのことを全学年に自分達の言葉で伝える。このことを立志式と呼んでいる。６年生児童は，校長から学校の目標や進む方向を聞かされ，それを伝達することで学校運営に参画する態度が芽生える。最高学

年としての自覚が生まれるのである。

イ　遠足

【遠足：海浜公園】

遠足は学校行事であるが，全学年が同じ場所へ行くので異年齢集団の活動の場ととらえ実施している。

異年齢集団での活動時間について，代表委員会から協議の結果を各学年(複式)におろして話合い，教師側のねらいとミックスさせて取り組んでいる。

代表委員会で協議される主なものは，行き先に応じて「みんなが楽しく遊ぶために」はどんな形（低･中･高学年での出し物か４つの班の出し物）にするかである。遠足は１日中異年齢集団での活動になるので，弁当の後の出し物は学年でするというのも変化があって児童には好評であった。

②　保護者・地域との連携

ア　運動会

木岐地域の運動会は，以前から地域の共楽運動会として定着している。小学生は，小学校の種目で参加するという形態であった。ＰＴＡとは昨年から一緒にする競技を取り入れている。今年，６年生が総合的な学習で地域のお年寄りと交流を重ねてきた。その中で「運動会でお年寄りと一緒に競技ができたらもっと楽しくなる」という意見が出た。そこで代表委員会に諮り，全校児童と地域のお年寄りが一緒にできる競技を考えて入れてもらおうということになった。そこで実現したのが，「まけまけいっぱい　夢いっぱい」という競技（写真参照）である。老人会の方はもちろん地域の方々からも，新しい種目でよかったという意見をいただいた。来年度以降，この形が定着するものと思われる。児童会の発案で，学校行事を通して地域の方々や行事にかかわれてよい取組ができた。

【運動会の競技】

イ　夏のつどい

【親子で皿回しの競技】

「夏のつどい」はＰＴＡが主体になって行う学校行事である。夏休み中に実施するので，児童・教職員の負担が少なくなるよう配慮されている。ＰＴＡ数も減少しているので，内容は毎年大きく変わる。

昨年は，地域の「町づくり協議会」からの申し入れで，早稲田大学院生と木岐の町について考えるワークショップを取り入れた。大学院生と児童と地域の人が小グループに分かれてオリエンテーリングのように町を散策し，木岐の町のよいところや改善したらよい所などを巨大絵地図に描いて表した。

【巨大絵地図の完成】

夜は，ＰＴＡ主催の夜店を夏祭り風に行い幼児も含めた子どもたちが楽しんだ。

児童からの発案でなかったので，主体性に欠けるところがあったが，普段町の中にあって気にしていない物や道具に気付かされ，改めて考えてみるというものがたくさんあった。

このような外部からの申し入れが学校に来るということは，学校が町の重要な要になっているという証拠だと思う。

今年は，ゲームや遊びで１日を過ごした。児童の希望から，カローリング，皿回し，ドッジボール，宝探し等のゲームを親子のワイキキっ子班対抗で行った。来てくれた地域の方も，班に入って参加してもらった。

地域の方や保護者の方と接することで，より広がった人間関係を経験できた。大人のよい人間関係が児童に伝わるよい機会であることを実感した。

3　研究の成果と課題

家庭においても学校においても温かい環境で育った児童が，これまでと別の大きな集団の中で埋没していかないためにはどうすればいいのかという課題は，本校に突きつけられた命題である。この問題を解く方策として，「実生活から学ぶ」ことから始めるとよいという考えに至った。「実生活から学ぶ」とは，望ましい人間関係を築くということである。「聞く･話す」ことを通じて支え合い，励まし合う学級づくりをすることであると考えた。

この２年間の取り組みで，相手の意見を聞くということ，自分の意見を主張するということ，そしてそれぞれの意見を練り合いながら折り合いをつける。また，折り合いながら練り上げていくという話合いができるようになった。

しかし，少人数，複式での話合いにはマイナス面もある。そのことをどう工夫していくか今後の課題も明らかになった。以下，研究の成果と課題をまとめた。

（１）研究の成果

○　計画委員の活動が定着し，学級会の話合いが確実にできるようになった。

○　折り合う話合いができるようになり，折り合いながら深まる，練り上げができるようになった。

○　司会や黒板記録の仕事をして，個人の成長が見られた。

○　特活以外の場でも一人一人のコミュニケーション能力が高まった。

○　学級内の問題を議題として取り上げ，話し合えるようになった。

○　代表委員会が児童会の中心に定着し，学級会とのつながりが明確になった。

○　複式で行うと，上位学年にリーダー性が育った。

○　複式で話合いを行うことで，単学級より多様な意見が出て，話合いが深まった。

○　主体的に取り組めるようになった。参画する気持ちが強くなった。

（２）今後の課題

○　複式で学級会をすると，計画委員の活動する時間が持ちにくい。

○　話合いを決められた時間で深まりのあるものとするには，話合いの論点を明確にする必要がある。教師支援のタイミングが難しい。

○　小規模校は，経験を広げるために交流することが望ましいが，熱意を持った相手を探すことが難しい。

○　今後も学級数や教職員数が減るので，この２年間の成果を維持・発展させる方策を考えることが必要である。

話合いという児童の主体的な活動が主となる分野であるから，話し合うためのマニュアルづくりが大事となる。児童の実態に即して「話合いのためのマニュアル」を作り，それを徹底させて活動を軌道に乗せる。問題はそこからどう抜け出すかということである。

研究実践の中で明らかになったのは，心理的な面と方法論的な面からの課題であった。それらの解決のために，その両面を含めながら実践したことをもとに解決の方向を模索した。

まず心理的な面で問題となったのは，話合いから実践までの間に意欲が減退するということである。それは「話合い」によって学校生活が改善されてくる実感をどう味わわせるかということと言い換えることができる。

実践して明らかになってきたことは，話合いによる集団決定に個人決定も重ねることが意欲につながるということである。実践例として，共楽運動会における異年齢集団活動においてのめあてづくりをとりあげた。個人の目標が集団への寄与に

つながるということを実感すると，意欲が出るということが明らかになってきた。

また，学校生活が改善されていく実感を味わわせるためには場の確保，繰り返し，量の確保，質の向上を図っていかなければならないと感じている。そのために，ミニ学級会を実施してきた。平行してミニ集会も実施し，それらの「話合い」を重視してきた。ミニ集会は，異年齢集団活動でもあるので，休み時間を利用したり朝や帰りの時間を使ったりしたことは，活動をどのように効率的に利用するかという研究にもなった。

実践を重ねていくことの重要さを改めて認識するとともに「話合いのルール」を徹底させることが意欲につながるということもわかってきた。

基本的なことの一つは，話し合うのは折り合うために話し合うのだということ。もう一つは，決まったことは必ず実行することの二つである。

この基本を徹底させていくことの重要さを認識すると同時に，議題そのものについても意欲の出やすいものと出にくいものとがあることがわかってきた。話し合う価値のある議題とはどういうものなのかという例として「輝き見つけよう会をしよう」という活動を挙げたい。人権にかかわることをしっかりと話し合い，自他の感情をも理解した上で折り合っていくという経験を積ませたことによって効果が多方面にあらわれるという結果を得ることができた。

これは一例であるが，話し合う価値のある議題を見つける，あるいは教師側から提示することが意欲付けに大きくかかわってくるとの手応えを感じたのである。しかしながら，議題によって左右されるのでは効果や効率といった点からは問題である。教師がどのように議題に付加価値をつけるかという工夫をしていくべきだという結論となった。話し合う価値のある議題を教師側から提示できるかどうかが課題であると認識するようになってきている。

最後に大きな課題として，小学校から中学校へつなげていく問題がある。本校においても児童と学校の実態に即して，最も効果的な活動形態を考えて実践してきた。しかし，それらが中学校へ引き継がれていくかといえば，残念ながらほとんどない状況である。２カ年の実践の効果を検証するすべがない。この問題のハードルを少しでも低くする小学校側の努力の方向として，前述した「ミニ集会」や「ミニ学級会」でのやり方を研究し，もっと洗練していくべきではないかと考えている。もっと簡単に「話合い」ができるようなマニュアルをつくって，小学校高学年の２，３学期にはできるように指導していくべきであると考える。要点は「計画委員の活動」であるように思う。計画委員の活動をもっと簡素化して，中学校での教科担任制でも実行できるようなものにしておくと可能性が高まるのではないかと思う。そういう方向での課題があると考える。

平成２２年度研究協議会資料《教育課程》

学校名（ふりがな）	きたきゅうしゅうしりこいししょうがっこう 北九州市立小石小学校

校 長 名：大庭　正美
所 在 地：福岡県北九州市若松区宮前町
３番１号
電話番号：093-761-4233

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	特別活動

≪研究主題≫

特別活動における集団活動の活性化を通して，豊かな人間関係づくりができる子どもの育成

【研究の要点】

〇研究主題設定の理由

特別活動の目標には「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的態度」の育成が掲げられている。したがって，特別活動が目指すことは，子どもの社会的な自立の基礎を養う小学校教育の中において，ますます大きな役割を担うことになると思われる。本校は，児童数220名弱，学級数が7の小規模校である。したがって児童の人間関係も単調で固定化してしまいがちになる。そこで多様な人間関係を作りやすくするために，これまでも異年齢集団活動を重視するなど指導の工夫を行ってきた。今後，さらに異年齢集団活動を拡充するとともに，学級内の横の人間関係も同時に豊かにすることで，多面的な自己や他者のよさに気付かせ，何事にも自信をもって取り組める逞しさや協調的に活動できる態度を身に付けることが大切であると考えた。

〇研究の重点

特別活動における集団活動の活性化と児童相互の豊かな人間関係づくりには相関関係があることを明らかにする。そして，特別活動における集団活動の活性化が，どのような指導の工夫によって実現できるのかを究明する。

〇研究に対する基本的な考え方

特別活動の各内容の特質に応じて集団活動が活性化すれば，児童のダイナミックな相互交流が起こり，児童の豊かな人間関係づくりにつながる。そしてそれは，よりよい集団を創造することや，児童の自主性や活動意欲を高めていくことが期待できる。

〇取組の概要

- 道徳教育の中でも望ましい人間関係づくりや協力する態度，思いやりの心の育成などを重視し，それらを明らかにするために道徳的実践の場である特別活動（特に学級活動や異年齢集団活動）の指導の在り方について実践的な研究を行った。
- 集団活動の活性化が，望ましい人間関係づくりや協力する態度，思いやりの心の育成に資することを明らかにするため，学級活動や異年齢集団活動の指導の在り方を実践的に研究した。
- 「ヨコの人間関係づくりを豊かにする学級活動の指導の充実」に向け，話合い活動（学級会）に子どもが自主的・意欲的に取り組むための『8つのポイント』を設定し指導の工夫を試みた結果，児童が自主的，意欲的に話合いに取り組むようになった。
- 「タテの人間関係づくりを豊かにする異年齢集団活動の活性化」を図る工夫として，リーダーの育成や多様な活動の場の設定等に取り組んだ結果，児童の人間関係が良好になり，豊かな学校生活を送ろうとする意欲や態度の育成につながった。

〇実践への着眼点

集団活動の活性化を図るために，以下のような点に着目し，具体的な指導の工夫を行うようにする。

着眼点1…ヨコの人間関係づくりを豊かにする学級活動（話合い活動）の活性化を図る工夫

着眼点2…タテの人間関係づくりを豊かにする異年齢集団活動の活性化を図る工夫

〇研究の成果

- 「ヨコの人間関係づくりを豊かにする学級活動の指導の充実」に向け，話合い活動（学級会）に児童が自主的・意欲的に取り組むための『8つのポイント』を設定し指導の工夫を試みた結果，児童が自主的，意欲的に話合いに取り組めるようになった。
- 「タテの人間関係づくりを豊かにする異年齢集団活動の活性化」を図る工夫として，リーダーの育成や多様な活動の場の設定等に取り組んだ結果，児童の人間関係が良好になり，豊かな学校生活を送ろうとする意欲や態度が育ってきた。

〇今後の課題

- 今後は内容（2）の指導の充実を図るなどして，個と集団との関係についても研究していくことが求められる。
- 異年齢の人間関係づくりに関して，さらにダイナミックな活動が展開できるような指導計画の作成が必要である。
- 継続的で系統的な指導を行うために，学校としての指導のスタンダードを明確にするとともに，その定期的な確認や見直しなどを行っていく必要がある。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，福岡県北九州市若松区の高塔山東北丘陵地帯に位置している。海岸にも近く，校区の多くが住宅地である。昭和 26 年に創立され，本年度で創立 60 周年を迎える。児童数は近年減少傾向にある。

平成 16 年度から，豊かな体験活動と道徳の時間との関連を図る道徳教育を重点的に行った。19 年度からは，特別活動の研究に取り組んでいる。また，地域の人材や諸行事を生かした学習にも取り組んでいる。素直で礼儀正しい児童が多い。

学校規模が小さいため，児童の人間関係も単調で固定化してしまいがちになる。そこで，多様な人間関係をつくりやすくするために，これまでも異年齢集団活動を重視するなど指導の工夫を行ってきた。

２　学校の概要（平成 22 年 4 月 5 日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	1	2	1	1	1	1	0	7
児童数	28	42	34	41	37	35	0	217

教員数　11 名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

特別活動における集団活動の活性化を通して，豊かな人間関係づくりができる子どもの育成

(2) 研究主題設定の理由

社会の変化は，子どもたちの生活にも影響を及ぼした。例えば，数十年前まで，子どもたちは学校では同年齢集団（＝学級）で学習し，家庭・地域では異年齢集団で遊ぶというのが一般的であった。その中で子どもたちは多様な人間関係を体験的に学んでいた。しかし，現在，その学びの場が乏しくなったと感じられることが多い。

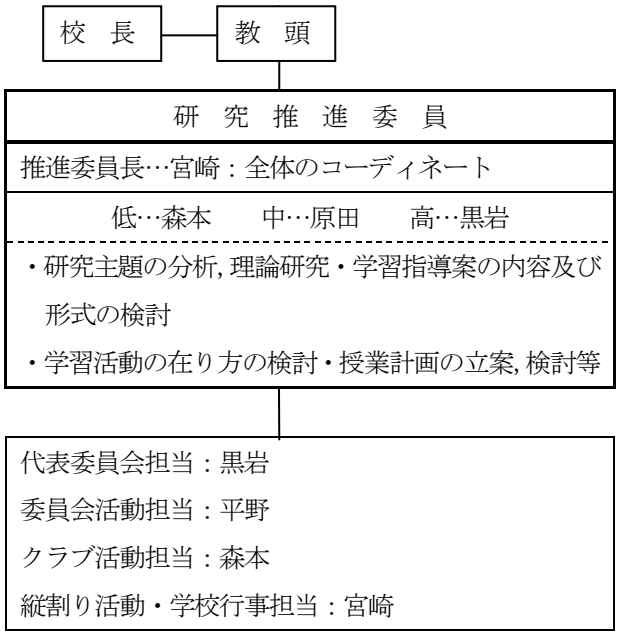
また，引きこもりやニートなどが社会問題化し，「生きる力」の育成が叫ばれ，今まさに社会的な自立に資する教育が求められている。その中でもカギとなるのは人間関係をつくる力の育成であろう。その中心的な役割を担うのは特別活動である。特別活動の目標には「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的態度」の育成が掲げられている。したがって，特別活動が目指すことは，子どもの社会的な自立の基礎を養う小学校教育の中において，ますます大きな役割を担うことになると思われる。

本校は，児童数２２０名弱，学級数が７の小規模校である。したがって，児童の人間関係も単調で固定化してしまいがちになる。そこで，多様な人間関係をづくりやすくするために，これまでも異年齢集団活動を重視するなど指導の工夫を行ってきた。

今後，さらに異年齢集団活動を拡充するとともに，学級内の横の人間関係も同時に豊かにすることで，多面的な自己や他者のよさに気付かせ，何事にも自信をもって取り組める逞しさや協調的に活動できる態度を身に付けることが大切であると考えた。

以上のような理由で，本主題を設定し，実践研究をしてみることとした。

(3)　取組体制



○校内学習環境整備	原田 森本 平野	・学校全体の特別活動的学習環境整備の計画 ・作業計画及び作業分担
○児童実態調査統計	西田 光武 園田	・年度当初から２学期末までの児童の実態調査 ・統計，考察
○論文・紀要	黒岩 宮崎	・論文，紀要執筆時の構成，資料収集の計画及び分担
○資料管理・保管	佐内	・学習[授業・委員会の活動等]に関わる資料の収集，整理
○授業・協議会記録	城崎	・研究授業の記録（VTR/デジタルカメラ）

(4)　２年間の主な取組

平成21年度	・研究内容の確認と年間計画の作成 ・異年齢集団活動の指導法の工夫 ・学級活動の実践研究(公開授業研究会開催) ・学級活動授業づくりの研究（全学級授業） ・研究発表会開催(全学級授業公開・児童発表) ・授業記録のまとめ ・学校研究論文作成 ・研究の成果の把握と課題の確認 ・指導計画の見直し
平成22年度	・研究内容の確認と年間計画の作成 ・異年齢集団活動の指導法の工夫 ・学級活動の実践研究(公開授業研究会開催) ・学級活動授業づくりの研究（全学級授業） ・授業記録のまとめ ・学校研究論文作成 ・研究の成果の把握と課題の確認 ・研究のまとめと次年度の方向性の確認

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1)　研究の重点

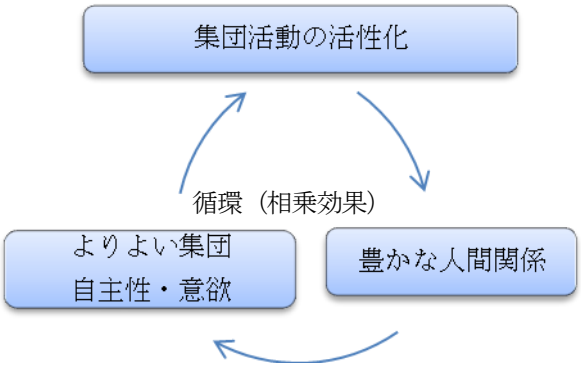
特別活動における集団活動の活性化と児童相互の豊かな人間関係づくりには相関関係があることを明らかにする。そして，特別活動における集団活動の活性化が，どのような指導の工夫によって実現できるのかを究明する。

(2)　研究の構想

①　基本的な考え方

特別活動の各内容の特質に応じて集団活動が活性化すれば，児童のダイナミックな相互交流が起こり，児童の豊かな人間関係づくりにつながる。そしてそれは，よりよい集団を創造することや，児童の自主性や活動意欲を高めていくことにつながっていくことが期待できる。

②　基本的な考え方の構造



人間関係づくりが円滑に行われることにより集団における「役割・責任・貢献」などの社会的な価値も体験的に学ぶことができる。それは社会参画意識を生み出すことに通じ，他と協力しながらよりよい社会生活を創造していこうとする意欲を高めることになる。このことによって特別活動の目標が達成され，生活づくりの好循環が生まれると考える。

③　実践への着眼点

集団活動の活性化を図るために，以下のような点に着目し，具体的な指導の工夫を行うようにする。

着眼点１

ヨコの人間関係づくりを豊かにする学級活動（話合い活動）の活性化を図る工夫

ア　学級づくりと学級活動の実践との関連のさせ方

イ　児童が本気になって取り組む議題の選定と話合いの柱の吟味

ウ　話合いの意欲や技能を高めるための教師の効果的な助言や場の設定の工夫

着眼点２

タテの人間関係づくりを豊かにする異年齢集団活動の活性化を図る工夫

ア　児童が本気になって取り組む活動づくりの工夫

イ　組織や指導計画づくりの工夫

・　特設の異年齢集団（縦割り班）の活用

・　振り返り活動の工夫

④　具体的な手だて

着眼点１について

ア　学級活動と学級づくりの関連

学級活動で取り扱う内容の意義や価値を明確にするため，学級づくり計画案と関連させて学級活動の年間指導計画を立案する。

イ　議題選定と話合いの柱の吟味

学級活動の話合い活動（学級会）に児童が自主的・意欲的に取り組むため，以下の８つのポイントの中から発達段階や学級の実態，議題の内容などに応じて重点を決め，指導の工夫を図るようにする。

①平易化する　誰にでも分かりやすい内容の話合いにする。→例えば，作業や具体的な活動を取り入れるなど。

②単純化する　できるだけ単純化する。→複数のことを同時に話し合わない。一つずつ解決していく，など。

③具体化する　具体的なイメージをもたせる。→実物，写真，映像などの資料を効果的に用いるなど。

④体験を重視する　体験に基づいたものにする。→体験を通して生まれた問題の議題化，体験的な活動を取り入れて話し合うなど。

⑤見通しをもたせる　見通しをもたせる。→予定表や具体的計画案を示すなど。

⑥展開を予測させる　話合いの展開を予測し，具体的な話合いのイメージをもたせる。→「一人会議」や「話合いのシミュレーション」の工夫など。

⑦個別思考を重視する　事前に自分の考えを書かせる。→「学級会ノート」などの活用をする，など。

⑧時間を確保する　考える時間を十分に確保する。→話合いの柱を吟味し，一本の柱にかける時間を十分に取る，など。

ウ　教師の指導助言の工夫

話合いの開始時の助言，話合い途中の助言，終末の助言ごとにポイントを明確にし，共通理解を図って効果的な指導助言を行うようにする。

＜開始時のポイント＞

学級会の意義・提案者の思い・集団決定への期待など

＜話合い途中のポイント＞

解説・論点整理・問い直し・板書への支援など

＜終末のポイント＞

提案者への賞賛・司会グループへのねぎらい・望ましい意見への評価・実践への期待・道徳的な言動への賞賛など

着眼点２について

ア　活動づくりの工夫

よりよい異年齢の人間関係が生み出される活動の内容や進め方について検討を行う。「思いやり」「信頼」「我慢」「協調」「協力」などがキーワードとなるような内容を，児童会活動，クラブ活動，学校行事ごとに盛り込むようにする。

イ　組織・指導計画づくりの工夫

以下の４点を重視し，組織や指導計画づくりを行うようにする。

・　６年生に対するリーダーシップの育成

・　１～５年生に対するメンバーシップの育成

・　多様な活動の経験

・　競争意識をもたせる

ウ　縦割り班の機能化と効果的な活用

特設の異年齢集団（縦割り班）を組織し，様々な機会に活用するとともに，継続的な活動機会を保障する。

(3)　具体的な取組

①　着眼点１に関する実践事例

ア　議題選定の工夫の点から

児童が本気になって自分の思いを伝え合い，よりよい結論を出すことができるようにするためには，話合いの経験を多く積ませなければならない。そのために「児童が話し合いたくなる議題」を選定する必要がある。切実感のある議題であればあるほど，話合いは活性化し，児童の相互交流は進むと考えられるからである。

したがって，以下のような視点で議題選定についての指導を行った。

- 実生活から生まれた問題か
- 実際に進行中の活動から生まれた問題か
- 決定内容が学級生活づくりに直結する問題か
- 相手意識をもって話し合わなければ解決しない問題か

例えば，４年生が担当している飼育当番の仕事を後輩にきちんと伝えたい。そうしなければウサギやニワトリが快適に生活できなくなる。だから，飼育の大切さや飼育の仕方を伝える活動を展開していこうと考え，議題化した例。また，２年生が週１回行う「クラス遊び」の時間がいつもうまくいかないため，どうにかしてクラス遊びを楽しくしようと，自分たちでルールをつくっていくことを議題化した例などが，これに当たる。

イ　学級活動の指導における「８つのポイント」に関わる実践

学級活動における話合い活動（学級会）に対して，児童が自主的・意欲的に取り組むために，学校全体として，８つのポイントに留意して指導を進めた。

低学年においてはポイントの①②③の「話合いの平易化」「単純化」，「具体化」を重視することで話合いへの抵抗を少なくし，誰もが参加しやすい学級会を実現することができた。

また，高学年においては，ポイントの④⑤の「体験の重視」や「見通しをもたせる」などに留意して議題選定を行うことで，児童の発言内容や集団決定が今まで以上に現実的で具体的なものにすることができた。

【低学年は「平易化」や「具体化」が大事】

ウ　学級づくりとの関連

学級内の児童同士の人間関係をよりよくすることと，学級経営の充実とは相関関係にある。年度当初に全学級担任が学級活動年間指導計画と関連させた「学級づくりプラン」を作成した。教師が，最終的に育てたい学級集団を明確にイメージしながら，学級活動の指導を行うことで，指導の重点や方向性が明確になり，結果的によりよい人間関係づくりを推進することができた。

②　着眼点２に関する実践事例

異年齢集団活動を充実したものにするために，朝の縦割り班活動の時間をはじめ，学校行事や児童会活動の中で，縦割り班を生かした活動を様々に展開した。

単に集団で遊ぶだけでなく班のメンバーが協力し合って課題を解決したり，班同士で競い合ったりする活動を通して，児童が互いに絆を深め合い，共に協力して活動することの楽しさを味わうことができるようにした。

学校行事では，運動会や校区の美化活動などの機会に，縦割り班ごとに取り組ませるようにした。

また，学級を離れ，縦割り班の仲間同士で給食を食べる「縦割りランチ」の取組や，全校集

会のオリエンテーリングに縦割り班で取り組む機会なども設定し，児童が体験的に人間関係を深められるようにした。

【縦割りオリエンテーリングの様子】

③　考察及び成果と課題

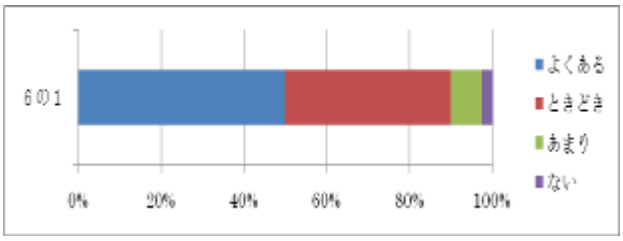
学級活動を児童にとって学級生活づくりの場として機能させるには，自主的・意欲的・積極的に取り組める内容が必要である。そのため，「議題を何にするか」「どのような集団決定をするか」が非常に重要であることは言うまでもない。

今回，児童が本気になって取り組む学級活動にするために，議題の選定や助言の工夫など様々な工夫を行ってみた。それによって，具体的な集団決定ができ，実践化への見通しがもちやすくなった。

そのため，児童が自主的に活動する姿を見ることが多くなり，学級生活自体が活性化してきているように思われる。

それに伴って，多くの児童の活躍の機会が増えたと同時に，児童相互の関わりの度合も増えてきた。まさに研究主題に掲げた豊かな人間関係づくりにつながることだと言えよう。

一方，縦割り班を中核に据えた異年齢集団活動の活性化に関しては，児童会活動や学校行事の中で見られる児童相互の交流の様子はもちろん，下のアンケート結果に見られるように，日常の生活場面においても盛んな関わりが増えてきていることからも成果を認めることができるだろう。



「縦割り班活動以外でも班の人に声をかけて話をすることがあるか」（調査対象：６年生児童）

以上の成果は，継続的な取組の賜物であり，いかに豊富な機会を確保し，繰り返し活動できるようにするか，まさに「なすことによって学ぶ」という特別活動の指導原理を具現化することの大切さを再確認することとなった。

３　研究の成果と課題

具体的な成果として以下の２点があげられる。

○　「ヨコの人間関係づくりを豊かにする学級活動の指導の充実」に向け，話合い活動（学級会）に児童が自主的・意欲的に取り組むための『８つのポイント』を設定し指導の工夫を試みた結果，児童が自主的，意欲的に話合いに取り組めるようになった。

○　「タテの人間関係づくりを豊かにする異年齢集団活動の活性化」を図る工夫として，リーダーの育成や多様な活動の場の設定等に取り組んだ結果，児童の人間関係が良好になり，豊かな学校生活を送ろうとする意欲や態度が育ってきた。

また今後の課題としては，以下の点が挙げられる。

◇　今回は学級活動の内容（１）を中心に研究を行ったが，今後は内容（２）の指導の充実を図るなどして，個と集団との関係についても研究していくことが求められる。

◇　異年齢の人間関係づくりに関して，さらにダイナミックな活動が展開できるような指導計画の作成が必要である。

◇　継続的で系統的な指導を行うため，学校としての指導のスタンダードを明確にするとともに，その定期的な確認や見直しを行っていく必要がある。